

第百二十話 精強無比の名も悲し、関東軍！

関東軍と云うとどうも悪いイメージ、陸軍暴走のシンボリック的存在と考えられている。一方では精鋭無比とも思われていた。そのような関東軍は、大東亜戦争において如何なる役割を果たしたのであろうか？北方の脅威に大軍をもって備えているのみで、全般戦局に如何なる寄与をもしていない、揚げ句は中立条約に違反して侵攻したソ連軍に為す術もなかった軍隊であると諷られてもいるようだ。

1 関東軍の概要

関東軍の前身は、日露戦争で得た租借地、関東州と南満州鉄道（満鉄）の付属地の守備をしていた関東都督府陸軍部が前身である。1919年、台湾軍・朝鮮軍・支那駐屯軍と同じ軍として独立した。1928年張作霖爆殺事件、1931年柳条湖事件（満州事変の発端）を起こし、1932年満州国が建国された。1938年張鼓峰事件、1939年ノモンハン事件が起きた。尚、これより前の1937（S12）年7月には盧溝橋事件が起き、日本は、大東亜戦争に突入していった。1941（S16）年7月、独ソ戦にあわせて関特演（関東軍特種演習）の戦時動員を行い、関東軍は14個師団、兵力74万人以上となった。

（注：師団とは諸兵科編成1万から2万人前後の兵員、長期にわたり独立的作戦可能な兵団を云い、この概念は列国ともほぼ同じである。）



2 関東軍から他方面への戦力転用状況

(1) 関特演時の関東軍の師団数

直轄：5個師団（10D、14D、28D、29D、51D）、第三軍：4個師団（8D、9D、12D、57D）、第五軍：三個師団（11D、24D、25D）、第四軍：1個師団（1D）、その他：1個師団（23D）の14個師団である。（注：Dは師団）

(2) 香港攻略作戦への参加 1941年9月 51Dを抽出・転用

(3) 絶対国防圏設定(1943/9/30)に伴う防備強化の為所要の部隊を抽出・転用

○南方、グアムへ 10D、14D、29D、8D、1D、23D の6個師団

○沖縄・台湾等へ 28D、9D、12D、12D、24D、71D の6個師団

（71Dは、S17 琿春駐屯隊等を基幹に編成された。）

○本土防衛用 57D、11D、25D の3個師団

○朝鮮へ 111D、120D （何れも在満州の独立守備隊を基幹として編成した。）

以上の師団を他方面に転用したため、関特演時の常設師団は全て関東軍隷下を離れてしまった。

3 関東軍に対する師団の増強

十分に訓練された隷下師団を他方面に転用した関東軍の穴埋め措置

(1) 支那派遣軍から関東軍隷下へ 5個師団(39D、59D、63D、79D、117D)

ソ満国境の緊張の高まりもあり、当初は支那派遣軍隷下の精鋭師団の抽出が検討されたが、実際に抽出されたのは、支那戦線で後方警備を担当していた師団であった。

(2) 南方転出留守部隊を基幹とし、現地招集兵を補充して編成 6個師団（107D、108D、112D、119D、122D、123D）

(3) 「根こそぎ動員」兵で編成された師団 7個師団（135D、136D、137D、138D、139D、148D、149D）（S20/7 在満日系邦人男子35万人から25万人を動員）

(4) ソ連侵攻に伴い、朝鮮軍を廃止し新編された17軍方面軍が関東軍隷下に

* ソ連侵攻時の関東軍は、見掛け上相当な戦力だったが、実態は張子の虎とも云える。まともにソ連軍に抗しきれなかったのも理解できるが、それでも敢闘した部隊は多い。北を気にしつつ、支那で戦い、南方でも戦った日本陸軍であった。既に破断界を越えていたのだろう。日米戦前に戦線整理が出来なかったのが悔やまされる。

（第百二十話 了）